



農繁期の保育から

本田和子

「忘れられた子ら」ということばがある。「忘れられた子ら」を忘れ去らずに、私どもの教育の対象として考えねばならぬとする運動が起り、折あるごとにその子どもたちのよりよい生活のための企てがなされる。

しかし、私どもはこうして「忘れられた子ら」を思い出すのと同じように、「邪魔にされる子ら」の問題を考え、その子らのための対策をこうじているであろうか。

「忘れられた子ら」は成人たちの配慮の圏内から消極的に脱落した場合である。それに比して「邪魔にされる子ら」は成人たちから積極的に否定される。農村における農繁期の乳幼児は、まさにこの「邪魔にされる子ら」の例であろう。

私どもが農繁期季節保育を計画したのは、将来の保育者をこころざす学生たちに、農村の幼児たちの実態に触れさせ、その保育を経験させたからでもある。しかし、この「邪魔にされる子ら」のために安全で楽しい生活を提供してやりたいというのが、それ以上に強い動機であった。そして、もう一つ、この機会を通じて、文化財に恵まれず教育的な刺戟に乏しい農村の子供たちの中に、何か一つでもよい種子がまけたらという欲ばった願いも持っていたのである。

こうして、私ども一行四十名は県下の利府村に六ヶ所の託児所

を開いた。田植時であった。村当局と教会との援助のもとに、私どもとしては極めて恵まれたすべり出しであった。託児場所は、公民館、小学校の分教場、神社の境内と部落の集会所などさまざまであった。

「教室に廊下、運動場と遊び場は充分。ブランコや砂場もある。それにオルガン、電蓄までそろっている」と喜びの声を発するグループもあれば「床がふみぬけている。遊び場がない。雨が降れば身動きも出来ない。バケツをぶら下げての水もらいが一日の主要な仕事になりそうだ」明日からの十日間を憂え顔のグループもある。そして第一日が始まった。

夕方、実習生たちは口もきけないほどの疲労を背負って宿舎に帰ってきた。そして、「くたびれた」というのが第一声、続くものは「明日からいっただうしよう」という歎声であった。私どもはこの保育のためかなりの準備期間を持っている。何もないことを見越して材料もそろえてきた。子供たちを遊ばせるための数ヶのボール、軽い大きなお手玉、クレヨン、紙、簡単な劇遊び用のお面、クリームのあきびんなどのままごと道具等々。紙芝居も作ったし、それに毎日の計画もたててきたはずである。それでいて、手のつけようもない混乱の一日を過ごさねばならなかったのはなぜであろうか。

まず、登録人員と実際に集った人数との著しいずれが挙げられた。四十八名のはずの託児現場に百名近い子どもたちが押し寄せた。おやつが足りない。材料が足りない。いな、足りないどころか用意してきたことがかえって逆効果で、それを奪いあつてけんかがたえ間ない。

ついで集まってくる子どもたちの年令のはばが問題であった。二歳半から十二、三歳までの全く未組織の集団。つきそつてきた兄や姉と一時も離れまいと泣く幼児と、つきそいの役目も忘れて玩具の奪い合いに夢中になる学童と。泣き声とけんそうの一日が展開される。混乱をさめぬのに精力を使いはたしている保育者たちのすきを見ては脱走する幼児もある。

この期間に、少しでも清潔の習慣をつけたいと望んだ私どもの意図がまた、保育の困難を倍加した。水の不自由な託児場所では、実習生たちはバケツを下げての慣れぬ往復で消耗しつくしてしまう。子ども達の真黒な手は、涙の結晶のようなこの水をも五、六人で泥水にしてしまうのである。

そして、朝の七時から午後五時までという十時間保育の長さがあった、想像を絶するものであったらしい。「午後からは、もう何とかしてお昼寝を長びかせよう、おやつをゆっくり食べさせよう、そんなことばっかり考えました」と実習生たちは苦笑しあつた。この一日の経験が土台となつて、各々のグループごとにあらかじめたてられていた机上の案が検討され修正された。計画というもの、いかに対象の実態に根ざさねばならないか、あるいは与えられた場に、そして保育者の保育力にそくさねばならないかを身を持って体得した実習生たちである。あるグループでは遊具と

して準備してきた材料を全然出さないことにした。板じきのガラシとした広い会堂一間を与えられて、戸外の遊び場の全然ない公民館グループである。この場所、こういう対象では、自由遊びを出来るだけ少くするのが、子どもたちと保育者とが安全に生活し得る最上の方法だといふのである。事実、最初の一日で、玩具の奪い合いからつかみ合い、はてはままごと道具のはずのあきびんの投げあいといった場面が生じ、夢中になつてとめようとした保育者の一人が腕にかみつかれるといった珍事態が起つていたのである。実習生たちは、自分たちの当面している保育の場が、教室で学んだ理論を適用するに余りにへだたつたものであるのに当惑し、混乱してしまつた感じであつた。

私どもはもう一度ここで行う保育の目的を考え、最低線の達成水準を共通目標として括り出した。とにかく、健康で安全に、出来るだけ楽しく生活させること、一日中泣いている子どもや、たんの母親の下に脱走する子どもの存在は保育が楽しくないことの現れではなからうか。そして、生活のきまりを守ること、食べる、寝る、排泄などに、ここで生活する十日間だけでも望ましい態度をとらせたかった。それが本當の習慣となつて根を下すかどうか、そんなことはわからない。そしてまた、そこまで怒ばることとは出来なかつたから。出来れば、爪を切つてやつたり、しらみを駆除してやつたりして子どもたちをいまま少し清潔にするよう手をかけてやること、「爪を切つていらっしやい」あるいは「爪を切つてきましようね」という約束や指示が「邪魔にされている子ら」にとつてはどんなに無意味なものであるかを、私どもは知らされていたのである。

ついてくる大きい子どもたちの処置が問題であった。年令別の取り扱ひも一応考えてみたが、場所の条件からも、また幼児と分けることの困難さからも、無理が見えていた。それなら一そ帰してしまおうか。しかし、また、学童たちも農繁期のお休みに学校から閉め出され、忙しい成人達から無視される存在であつてみれば、「邪魔にされる子ら」によりよい生活を願う私どもの対象である。野放しに過ごさせる十日間よりも、少くとも教育的に整えられた健康な十日間が、彼らのためにも提供されねばならないのである。私どもの保育計画には子ども会的な色彩が強くなつた。大きい子どもたち、とくに勢力のあまつている男の子どもたちのための活動も用意された。年令の差をあまり問題とせず、共通に興味を引き得る材料として、またおおぜいの子どもたちを落ちつかせ集注させる最も効果的な手段として、紙芝居、幻灯などの視聴覚教材が大量に取り入れられた。いささか過剰ではなからうかと憂えられるくらいに。

練り直された計画表による保育が展開された。しかし、二日、三日と経過するにつれて実習生たちは首をかしげ始めた。「計画通りに運ぼうとするのたいへんです。どうもうまくいかない。」口々にこぼすのがこれであつた。除いたはずの自由遊びがいつの間にか入りこんでいる。計画表と実際は常にくいちがう。計画通り指示する活動に子どもたちは一向に乗ってこず、万策つきて思抜きに連れ出したお散歩で、歌を歌つたり花をつんだり大喜びする。「予定してもないことに半日を費してしまいました」と何だか甲しわけなきえうに、それでいて楽しそうに報告する実習生もある。ここで、子どもは、スケジュールにとらわれる保育がいかに不

自然であり、無理であるかを学んだ。この対象は、年令の幅こそあれ、全く集団としてのかまへの出来ていない未組織の子どもの群であるという点で、幼稚園や保育所で扱う対象の性質に近いものを持つてゐる。実習生たちはここで「保育の場における計画は流動的でなければならぬ」とか「子どもの自発的な興味に根ざした活動を充実させねばならぬ」とかいう保育の理論を、全く適用の余地もなく思われたこの場で、改めて認識しなおすことになつたのであつた。

そして、託児期間も終りに近づいた頃、おのおの託児場所に応じた生きた保育が生まれ始めた。K部落託児所は最も物的な条件が悪かつた。神社の石段の中腹にある小さな部落の集会所が開催場所、前はがけで庭は全然ない、かなりの石段を上りきつた境内が晴れた日の遊び場であるが、屋内からの見通しはとも出来ない。水は石段の下まで、机や椅子はあるはずもない。そこで行われたある口の保育を示そう。朝の礼拝の後、幸の晴天を利用して希望者を戸外に連れ出すことになつた。実習生も二つに分かれて残り組は、子どもと一しょに絵を描いたり、本を読んだりすることにして戸外組は出発した。人数が減つて落ちつきたい残り組は、ちびたクレヨンや古い絵本に集注している。一方、戸外組はちょうど満開の山あじさいや藤の花で花束を作つたりして遊ぶうち二人の実習生を飾り立てて花嫁さんを作ることを思いついた。髪をとかすもの、花輪を編むもの、それをつけるもの、ああでもない、こうでもない熱心に装わされて美しく仕上がった花嫁花むこは、行列を作って託児所へ帰ることになつた。「嫁添い」と称してエプロンの裾を持つもの、後につづくもの、皆大喜びであ

る。子どもの一人が言い出した。「帰ったらちようどおふるまいだね。」お昼の時間であった。花むこが提案した。

「残っている人たちに知らせて、皆ちゃんと坐ってお嫁さんを待たせてもらいましょう。」大きな子どもが二人「先触れ」をした。知らせを受けた残り組は部屋を片づけ、手を洗ってきちんと坐り行列の到着を待った。いつもごった返す手洗いが、今日は半分ずつできわめてスムーズにすんだわけである。花嫁の一行は順々に手を洗う行儀よくおじぎをして部屋に入る。最後に花嫁花むこが文字通り花で埋まって真中に坐り昼食が始まった。「おふるまい」のお弁当が子どもたちにもどんなに楽しくおいしかったことである。そして、実習生にとってはこんなにスムーズな半日はなかった。「お嫁さんごっこ」という誘導保育をしたわけですね」とは、その日の夕方の感想であるが、いかにも農繁期保育の経験らしい野趣の豊かさであった。

過ぎてしまえば十日間は短い。子どもは奉仕をした以上に得たものが大きかった。さきにあげてきたような貴重な体験を通じて、試行錯誤をくり返しながら、保育のエッセンスともいえるべきものを学んだ。

この間に田植えの忙しさも峠を越していた。最後の奉仕に、子どもたちの頭にD・D・Tを撒布し、サヨナラ会を開いたりしてお別れを惜しむ学生たちに、部落の人々からさまざまな感謝のことばがおくられた。「汚い子どもたちをよく世話してくれた」「おかげで安心して働けた」などのお礼にまじって「家の子どもは御飯の前にお祈りをするようになった」という言葉が、実習生たちを非常に喜ばせた。しかし、これで私どもの蒔いた種子が根を下

したとか、保育の効果をうんぬんするのは少しせつちすぎもやし、あますぎる考えでもある。人間を変える営みはそんなになまやさしいものではないであろう。

それにしても、この期間中おおぜいの子どもたちの生命を安全に保護することが出来た。放り出された幼児が貯水池に落ちたとか、バスにひかれたという悲惨事は招かずにすんだ。何しろ忙しい農繁期の家庭である。三日間続けて「おもらし」をしても同じ下着同じ着物を着せられてきて、ひそかに「ミスターおしっこ」なる愛称を貰った男児もいるような、本当にかまわれない子どもたちの群を、専心かきりきりで可愛がり遊ばせ世話してやった。後に残って実を結ぶような効果はないかもしれないが、とにかくこの十日間をこうして過ごさせたということがすでに大きな効果であると私は思う。

それにつけても、農村における保育所の問題がもっと真剣に取り上げられねばならないのではないであろうか。明治十五年に出された「簡易幼稚園令」が思い起される。設置規準にしたがった保育所の設立が困難なら、簡易保育所を設けたらどうであろう。最低限度雨をしのぐだけの場所があればよい。ただし、保育者には専門の訓練を受けた人がほしい。あとはその保母の創意と情熱にまかせよう。そうすれば、農村の子どもたちは少くとも現在より幸福な、そして安全で健康的な生活を送り得るに違いないと思われるのである。

(尚綱女学院短期大学)